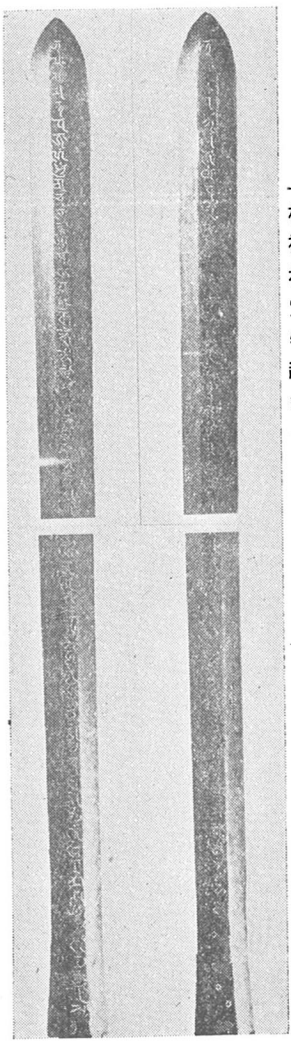
上杉神社宝物

禡祭の剣の梵字について

堀内寛仁



上杉神社宝物禡祭の剣（重要文化財）

(1) まえがき

上杉神社の宝物，禡祭の剣とは山形県米沢市南堀端町の元別格官幣社、上杉神社に秘蔵されている宝剣で，同神社宮司大乗寺良文氏の手紙（本学，中野義照先生宛）に依れば，その宝剣は早く国宝に指定され，現在も重要文化財の指定を受けている。長さ一尺三寸七分，剣の両面に金象嵌の梵字があり，（写真参照）片面の梵字の下部には七星が金象嵌されているので，我が国に伝える数少ない七星剣の一つといわれている由，同神社では，謙信公護持の祭器（軍神祭）と言い伝えているものである。

ところで，その金象嵌の梵文が不解であるから，というので，一応梵字がよめるように刀身の部分を撮影した上，写真同封で中野先生宛に同神社から判読の依頼があつたのである。確か九月末日頃と思うが，中野先生宅に立ち寄つた際，その写真を渡され，判読を命ぜられた私はその写真を自宅に持ち帰つて判読した処，すぐさまその梵咒は，一は不動明王の慈救咒であり一は不動能成就（これは後に少しちがうことが判つたが）であることが判つた。しかし第三の梵咒は全く私共に馴染みのない真言であつて，

一向見当がつかなかつた。しかし七星剣という先入観があつたので，或はと思つて北斗法に関する真言を調べてみたが，北斗関係にもない真言であつた。そこで全三咒の中，二咒までが不動明王の御真言であるから，或は全部が不動明王の御真言であるかも知れぬと，手許にある〝秘密の事相の研究〟や密教大辞典，その他，真言集などを調べてみたが，やはりそれらしいものは全然ない。結局こうなつたら蔵経について不動関係の儀軌をかたつぱしから見て行くより手がないのである。

ところで現在の我が国の仏典研究の段階では，大蔵経に現われる漢字音の音訳真言から直ちに原文（梵文）を想定することはとても出来ない相談で，ほとんど振仮名をたよりに御真言の読みを学習して来た私共には，翻訳当時の中国音で写した漢字訳真言をすらすら読みこなすことは，もとより不可能で，たとえ何等かの手段でこつこつ解明して行くという風な，そんな手段さえ，まづない。それにはまづ既知の真言について対訳漢字の音価を示す索引の如きものがまづ必要であり，更にその索引にない字については，それが索引にあるどの字と同音価の字であるかを韻鏡その他によつて決めてかからねばならないからである。これは仲々の仕事で，到底短時日にできる性質のものではない。要するに今日の段階では，これは一応わからないというより外は致し方のない状態であつた。しかし折角の問合せであり，せめて私の従来の少ない経験知識から来る勘をたよりに不動関係の儀軌のみでも，見てみようと蔵経を開いた。

さて不動明王の独立した儀軌類としては，下記の如きものがあり，まとめて大正蔵経21巻に収載されている。

1199，金剛手光明灌頂経最勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌法品（一巻）……唐不空訳……1頁

1220，底哩三昧耶不動尊威怒王使者念誦法（一巻）……唐不空訳……7頁

1201，底哩三昧耶不動尊聖者念誦秘密法（三巻）……唐不空訳……13頁

1202，不動使者陀羅尼秘密法（一巻）……唐金剛智訳……23頁

1203，聖無動尊安鎮家国等法（一巻）……27頁

1204，聖無動尊一字出生八大童子秘要法品（一巻）……31頁

1205，勝軍不動明王四十八使者秘密成就儀軌（一巻）唐遍智集……33頁

ところで収載順序にしたがつて，立印軌から御真言のみ拾つて行くと，幸な

事に禍祭剣の第三咒はこれだという御真言がすぐ見付かつた。全くまぐれ当りであるが，それは「渇誐印と共に用いて一切の事業がみな能く成弁する」と説かれている不動明王の剣印の御真言であつた。そこで剣の梵字と立印軌の漢字（音訳字）を対照して読んでみると，ますますこれに間違いないことが判つた。梵漢が互に他の不解点を解明することになるからである。もちろん次に示したように，未だに不明の処があり，また梵漢二者の間に，どうしても一致しがたい箇所もあるようであるが，これは我が国の梵字で書かれた真言が伝写の間にかなりの誤写，誤伝を持つている事を考慮に入れるならば，この程度の不一致は許されねばならないのである。

剣の梵字（写真，左上葉上から）を印刷上の必要から便宜ローマナイズして示し，之に立印軌の漢字（対訳字）を対比してみると，次の如くなる。

(na) (maḥ) (sa) (ma) (nta) (va or ve) (jra) (ṇaṃ) (?) (a) (ca) (la) ( )
曩 莫 三 漫 跢 嚩 曰囉二合引 赦 唵 娑 左 擺 迦引

(ṇḍa) (vu) (dhā) (ce) (ṭa) (ka) (hūṃ) (hūṃ) ( ) ( ) ( ) ( ) (i) (nāṃ)
拏 沒 馱 際 吒 迦 吽 吽 佉引 嗢 佉 嗢 伊 南㉔上

(hṛ) (rhr ?) (maṃ) (hā) ( ) (hā) (la) (vi) (sa) (saḥ)
仡哩二合㉓上用*下* 囉㉕怛㉗曩㉘三合 拏含 賀引 擺 賀 擺 尾 沙 索㉙入

(pta) (aḥ) (hṛ) ( ) (ha) (pha) (ṭu) ( ) (rya) (ca) (la)
跋㉚跢二合 惡 紇哩㉛引入 赦 賀引 發 吒㉜吒半音 阿㉔引 哩夜二合 左 擺引*

(śa) (ccha) (kiṃ) (vi / ci / dhi ?) (rā) (ya) (si?) (i) (nāṃ) (kā) (ryaṃ) ( ) (ro)
蘖 縒 緊 止 囉引 也 ㉝徒 伊 南*上 迦引 哩養二合 矩 嚕

(svā) (hā)
娑嚩二合引* 訶㉞*引

以此真言　用前剣印，一切事業皆能成弁

かくして第三咒は以上の如く立印軌に説かれている不動剣印の真言であることが判つた。もちろん梵漢二咒を対比してみても，私にはやはり不明の箇所があり，咒文を全体として，一貫して之を説明する程度には理解できなかつた。

しかし兎も角梵咒がいかなる性質のものであり，その説処も判明したことであるので，この程度で先方にも満足して貰えるものと，中野先生に写真を受取つた翌日，すぐさま以上のことを文書で報告した。私としては，これで問題が終つたと思つていたのである。処で中野先生の方では是非文意を解明する必要

があると之を白石真道先生に廻わされたのである。しかし白石先生からは慈救呪の下に Phaṭ の加句がある点を注意して下さつたのみで，折角いままで私がやつた事であるから，私がやつた方が良いと送りかえされて来た，そこで私は再び成算のない調査にとりかかつたのである。それは文意を知るためには正しい形の咒文の原型が必要であり，正しい形を想定するためには文意がわからねばならぬからである。全くいたちごつこの調査で，時間をかけた割合には成績があがらず，その後本年度の秋季同学会に之を報告していろいろ諸先生から有益な教示や意見を受けたが，結局いまだに満足の行く結果は得られないのである。しかし本誌には先に恩師白石先生の〝武田信玄公の護身旗の梵咒〟解明の発表があり，その信玄公に対する上杉謙信公の禡祭剣のこれまた梵字真言という事で多少対照の妙もあり，かたがた中野先生の指示もあつたので，未解決のままであるがその報告をまとめて，ここに掲載することにしたのである。

(2) 第一咒，慈救咒について

まず禡祭剣の梵字をローマ字で示すと，（恐らく鏨(たがね)師は梵字の書風を知らずただその形を移したことから来る異形を勘定に入れて私がよんだ所を示すと）

(na) (maḥ) (sa) (ma) (nta) (va) (jrā) (ṇāṃ) (ma) (hā) (ro?)

(ṣa?) (ṇa?) (su?) (ṭu) (yā) (hūṃ) (tra) (ka) (hāṃ) (māṃ)

(pha) (ṭu)

以上のように，写真では

1. mahā の hā の字が上半部分しか見えず，

2. つづいて ro, ṣa, ṇa の三字が全く見えない，

3. また Sphoṭaya の spho 字も su の如くにも見える，しかし次の ṭa 字との間隔が少し広いようであるから，元来 Spho or spha とあつたと断定することができる。それは前述の大乗寺宮司の書翰に，宝剣は一度火に罹つた？とも考えられ文字の磨滅等もある由であるからである。

4. 次に ṭa 字はその字の下に u を示す汙点（⌒）があり，いかにも ṭu の如く見えるが，これは ṭa 字に virāma（⌒）を附した ṭ の彫り誤りで，u 点ではない。それは u を示す汙点には ろ ㇏ ヽ 等の形があるが，通常 ṭa 字

に対しては（ৎ）の形は用いないからであり，更にまたこれが ṭu でなくて ṭ であることは次の事からも断言できる，それはこの誤まりは第二咒にもあり，第三咒に於ても常に繰りかえされて常に phaṭ とあるべき処が，悉くこの形の phaṭu になつているからである。

ところで ṭu は ṭ の誤りとして，ここで不動尊の慈救咒として ṭ は ṭa でなければならぬのに，どうして ṭa が ṭ と書かれたかについては恐らく不動の真言には phaṭ なる語が実に屢々用いられているので，当然 Sphoṭaya 或は俗語形としても Sphaṭaya と phaṭa でなければならぬ筈が，しばしば瀕出する phaṭ と誤まり書かれたものであろう。かかる種類の誤りは実に我が国の古写本には無数にあり，この禍祭剣の第三咒の漢字訳に於ける囉怛曩（ratna）の如きもその一例であろうし，この慈救咒ではないが同じ不動明王の御真言中の Sphaṭaya が Sphaṭya と書かれている実例が大師請来梵字真言集（多分室町初期の転写本で原本でない）にも見えている。（長谷宝秀編纂，同書，下巻192頁威怒真言参照）

なお，百歩譲つてこの御真言の原型が phaṭ となつていたという人があるかも知れないが，もし然らばその際の ṭ 音は梵字の書法として次の ya 字とともに ṭya と書かれねばならぬからその議論は成立しないのである事を附記しておこう。

5. 次に yā は明らかに ya の誤写と認定する。

6. 次に traṭ を tra-ka とした事はこれまた同上書に実例があり，ṭ が次の hāṃ, māṃ の ha（日本読み‘カン’）に引きずられれば trak となる可能性は充分にあり，その K 音が Ka と書かれたにすぎないから，あり得る誤伝である。

こう見て来ると，この真言が

Namaḥ samanta-vajrāṇāṃ! mahā-roṣaṇa sphoṭaya hūṃ traṭ hāṃ māṃ

という不動の慈救咒を書いた（彫つた）ものに間違いないことは何人も否定できないと思う。

而して次の phaṭu は phaṭ の誤りで ṭu の如く見えるのが ṭ の彫り誤りであることは上に説明した通りであり，この phaṭ なる二字は加句である。加句とは息災には oṃ とか Svāhā，調伏には phaṭ 等の語を真言に加える事をい

い，大日経具縁品（大正18．9．C）には

等正覚真言　言名成立相　如因陀羅宗　諸義利成就　有増加法句

本名行相応　云々とあり，

この後に加句の語やその用法が説かれている。

なお，真言の句義は既に栂尾先生が大日経の対訳漢字を掲げて秘密事相の研究（P.488）に訳されているので，それを次に転載する。

南（ナウ）　麼（マク）　三曼多（サンマンタ）　伐折囉赧（バザラダン）
namaḥ　samanta-vajrāṇāṃ
普く諸金剛に帰命す

戦荼（センダ）　摩訶路灑儞（マカロシャナ）　薩破吒也（ソハタヤ）　吽（ウン）
caṇḍa-mahā-roṣaṇa　sphoṭaya　hūṃ
暴悪，大忿怒の相あるものよ，破壊せよ，恐怖の聖語

怛囉吒（タラタ）　悍（カン）　漫（マン）
traṭ　hāṃ māṃ
残害の聖語　二種共に種子

この真言に於ける悍（hāṃ）なる種子は因業（hetavaḥ）を空無（ṃ）にする三昧（ā）を表わし，漫（māṃ）は吾我（mama-kāra）を空無（ṃ）にする三昧（ā）を示したものである。（以上秘密事相の研究）

この中

1）諸金剛とは金剛部の諸尊を指し，金剛とは直接には金剛杵のことであるが，金剛杵は仏智の象徴であり，ここで金剛とは金剛の如き堅き智を有する者の意である。

2）暴悪大忿怒者の相を有する者とは，いうまでもなく内心の智をかくして外に奴僕の姿を現わす不動明王の事で，漢訳経典で威怒王と言われている威怒はこの caṇḍa の訳語であろう。

3）Sphoṭaya のローマナイズは正しい梵語であるが，その訛略 Sphaṭaya が直接には対訳漢字の〝破〟に一致する。

4）traṭ の説明の残害とは底哩三昧経等に依れば不動明王は修行者の残食の供養を受くるとある。これ不動明王の智徳が煩悩を根こそぎ噉い尽くす事を象徴したものである。

此尊本願，大悲捨身，奉侍一切持誦者，身如奴僕，現一目相，受此残食供養〔一巻本，大21.10C〕

喫残食者，噉一切衆生悪業煩悩重障，令尽無餘〔三巻本，大21.15.C〕

(3) 第二咒，金剛密心の真言について

第二咒は慈救咒につづいて（写真では右上葉の最後の一字 na より）七星の象嵌の上までに彫られ，写真によつても良く見える。即ちローマナイズして示せば次の如くになる。

(na) (maḥ) (sa) (ma) (nta) (va) (jrā) (ṇāṃ) (a) (ca) (la) (kā)
(ṇḍa) (ca) (ṇḍa) (mā) (dhā) (ya) (pha) (ṭu or ṭau)

この中，kaṇḍa は kāṇa の誤伝，mā は写真では mā に見えるが，原物では sā かも知れず，いずれにしても sā の誤まりと見，また ṭu は ṭau の如くにも見えるが，例の ṭu かも知れず，もしそうだとすれば，これは ṭ の彫り誤りであるから，この御真言は秘密事相の研究 P. 410 に掲げてある四度加行，胎蔵法の不動能成就の真言という事になる，すなわち

曩(ナウ)	麼(マク)	三(サン)曼(マン)多(タ)	嚩(バ)日(ザ)囉(ラ)	赧(ダン)
na	maḥ	samanta-	vajrā ṇāṃ	
帰命す		普く	諸金剛に	

戰(セン)拏(ダ)	唵(オン)	阿(ア)者(シャ)邏(ラ)	迦(キャ)拏(ダ)	
caṇḍa	oṃ	acala	kāṇa	
暴悪者よ	聖語	不動よ	眇目者よ	

者(シャ)嚕(ロ)	娑(サ)駄(ダ)耶(ヤ)	吽(ウン)	泮(パッ)吒(タ)	
caru-	sādhāya	hūṃ	phaṭ	
供物	成就のために	忿怒	摧破の真言	

と多少の句は前後するが殆ど同じである。そこで始めは永らくこの先入観に捉えられて第二咒は不動能成就と信じていた。しかし後に第三咒の文意やその原型の想定のため多少身を入れて漢訳の不動明王の儀軌類を通読していると，能成就とは別に，全く第二咒と，句の順序も一致し，また Caru のような余計な字を含まない，文字通り，全く第二咒と一致する真言を見付けることが出来た。それは立印軌で金剛密心の真言といわれ，金剛印と共に用いて能く一切の事業が成就すると説かれている真言であつた。次にあげるように，前に挙げた不動能成就の真言と同一語句ばかりであるから，たやすくその対訳漢字から原文（梵文）を想定することが出来る。そこで漢訳と対照して梵文を示すと次の

如くになる。

復次心真言ァリ　用ニ金剛密印一

此之真言　用金剛印　能為成就　一切事業

曩 莫 三 満 多 嚩 曰 囉二合*引 喃

na maḥ sa man ta va j rā ṇāṃ

娜 左 擺 迦 拏 賛 拏 娑引 駄 也 吽 発 吒㊀吒㊁字半音

a ca la kā ṇa caṇ ḍa sā dhā ya hūṃ pha ṭ

さてこれを禹祭剣の梵字と比べてみると，禹祭剣では Kāṇa が Kaṇḍa になつているが，Kāṇa は前にあげた能成就の真言の中にもあつたように不動明王の一眼を閉じて眇目であることを示す言葉で，不動明王の真言の語句としては誠に格好の言葉である。之に反して Kāṇḍa は大体〝部分〟という意味の言葉で前後の語ともつながりが悪く，これは Kāṇa の誤写誤伝と考えざるを得ない。しかもその可能性はまず我が国の御真言の読み癖の中に求めることが出来る。それは我が国の真言の読み癖としてはサマンタ（Samanta）をサンマンダと読み，バザラ（Vajra）を往々バンザラと読むからである。したがつてこの流儀で Kāṇa をよめばカンダとなるし，それを梵字に写せば Kaṇḍa となるのである。しかし誤写誤伝の原因としては，またこうも考えられる。それはこの御真言には Kāṇa につづいて直ぐ Caṇḍa があるから，その Caṇḍa の ṇḍa を誤つて記したのかも知れないのである。更にまたこうも考えられる。それは漢訳字の〝拏〟は Caṇḍa の ṇa を写したもので，ṇ の音は ca と共に〝賛〟の字で写されているけれども，誤まつて拏が ṇḍa であると解する者があれば，迦拏の拏もまた ṇḍa と考えることになり，同じ漢訳字があるからとの理由で（Caṇḍa なる語は他の金剛部の諸尊の真言にもしばしば現われ馴染み深いが Kāṇa なる語は不動尊の真言にのみ現われ馴染みが少ないので，）馴染み深い既知の Caṇḍa より類推して正しい Kāṇa が，意識的に，無意識の誤写ではなく反つて故意に改悪されたのかも知れないのである。誤写誤伝の原因，理由としてはこの様にいろいろと考えることが出来る。しかしいずれにしてもここは対訳漢字の上から見ても（立印軌の対訳字のみならば，一対一であろうが，漢訳には他の底哩経等にも同音異字で対訳されているから）ここは対訳漢字の上からも，文意の上からも，Kāṇa が正しく Kāṇḍa は誤まりであると断定せざるを得ないのである。

ただし，この誤りは，鍳師の彫り誤まりでない事はもちろん，恐らく鍳師に梵字を示した人の犯した誤写でもなく，その人の依用した原文そのものが既に Kaṇḍa となつていたものと思われる。それは前述の大師御請来，梵字真言集の梵字が既に Kaṇḍa となつているからである。

恐らく禍祭剣の梵字はこの大師請来真言集と同系統の写本から転写されたものと思われる。この事は第三咒と請来真言集の梵字を比較するとき，更にその感を強うするのである。

なお立印軌に於ける，この金剛密心の真言は底哩経では帰命句は省かれているが金剛杵の印と共に用いて，行者が便所等で身体がけがれた時，その身を加持浄除する真言として説かれ

一巻本では　唵　阿者邏　迦㉔曩　戰拏　沙駄耶　吽　泮㉕吒（大21.7B11）

三巻本では，不動金剛杵印の真言として

唵　阿者邏　迦拏　戰荼　莎駄耶　吽　泮吒（大21.17B15）

と音写され，また不動使者法では，獅子奮迅印の真言として

那摩　三曼多　末實囉喃，唵　阿者㉒羅迦那　戰拏　娑㉓太耶　吽＊泮

と説かれている。

それぞれ迦曩，迦拏，迦那で．何れも Kaṇḍa よりは Kāṇa の方に近い事からも Kaṇḍa が Kāṇa の誤写であることがよく判かるのである。

以上の事から禍祭剣の第二咒は，いずれにしても不動明王の御真言で，金剛杵印と共に用いられる真言であることが判明したが，軍祭剣の事であり，大小不浄の浄除とは直接関係がないので，右儀軌中でも，立印軌に依つたものであり，直接には立印軌の諸真言が梵字で収録されている〝大師請来梵字真言集〟（そのものでなくとも，同系統の写本）に依つたものであることは明らかで，この事は第三咒に至つて益々明らかとなる。

なお，梵本 Sādhana-mālā（G.O.S. vol. 26）に (1) tri-samaya-rājasya sādhana (2) tri-samaya-rāja-sādhana と名付くるものがあり，その前者には立印軌の金剛密心の真言が心真言として説かれているが，それには Kāṇa が Kāla になつている。Kāla には〝黒〟という意味と〝時間〟という二義があり，後義の Kāla は時の経過が全べてを滅すという事から，〝死，破滅〟の意味にしばしば用いられている。したがつて Kāla-Caṇḍa ならば一応，不動尊の

真言としては一伝として保存せらるべき形であろう。但し deva-nagari 文字では la と ṇa は殆ど誤写される可能性はないが，悉曇文字では ṇa（𑖡）は（𑖮）la に近く，また ṇa の異体（𑖢）は deva-nagari 文字の la（ल）に近く，刊本 Sādhana-mālā の原本が果していかなる文字で書かれていたか知る由もないが，その真言名から考えてもこの二者はもと一つのもので，当然そのいずれかが誤伝であるとするならば，印度に於ては不動尊の遺物が殆ど現存しないことから考えて，Kāla は刊行者の原本の見誤りでないかと我田引水したいが無理であろうか。

(4) 第三咒，不動剣印の真言について

さて，まえがきに掲げた梵漢対照表によつて，禹祭剣の第三咒が立印軌に説く不動剣印の真言にまちがいないことは一応わかつた。しかしその細部に至つては梵漢は必ずしも一致せず，しかもそのいずれに依るも直ちにその文意を得る事は困難である。そこで之を他の不動経典についてみると安鎮国家法（No. 1203）並びに四十八使者儀軌（No. 1204）にはこれに該当するものがないが，幸い底哩三昧耶経には始めの帰命句こそ省かれているが，一巻本（No. 1220）にも三巻本（No. 1201）にも立印軌のそれと殆ど同じものが，やはり不動剣印の真言として説かれて居り（一巻本，大21. 12B[23]以下，三巻本同20C[15]以下）また『不動使者法』（No. 1202）では立印軌のそれが前半と後半とに分けられ，おのおの独立の真言として前者は不動使者辟一切悪毒呪（大21. 25 B）と名づけられ，後半は帰命句が附加せられて不動迎請咒（大21. 52 C）と名づけられているが，共にその印はやはり剣印を用いる事が説かれている。そこでこれらの諸訳を対校して，この真言の正しい形を探究して見たい。

なお『大師御請来梵字真言集』に収載されている梵字不動尊儀軌は立印軌の諸真言を梵字で列挙したものであるから，普通ならばこの場合，梵字のことであり，漢字訳に比して最も有力な対校本たるべき地位にあるが，事実は先にのべた如く禹祭剣の梵字の原本に相当する性質のものであり，したがつて禹祭剣と同一種類の誤写誤伝を含んでいるので，現在この真言の正しい形を求めるためには直接有力な役割を果しがたいものがある。しかし一面禹祭剣の梵字の誤写誤伝を暗示する点があるので，同時に対照することにした。

またこの真言の説かれている立印軌を始め底哩経等の漢字経典に対し，それに相当する西蔵訳があれば，西蔵訳が持つ正確なる音写法に依つてこの問題はたやすく解決するものと思われる。しかし残念ながら目録に依る限り，いまの処これらの漢訳経典に直ちに相当する西蔵訳は求められないのである。

また酒井教授の「西蔵訳底哩三昧耶経に就て」の論文（密教研究69号）によれば，漢訳底哩三昧耶経には直接之に相当する西蔵訳はないが，底哩三昧耶経に関連するものとしては西蔵大蔵経に6本あり，その中(3)(5)は梵本(1)に相当し(4)(6)は梵本の(2)に相当するが，(1)は余り親しく関連しない由である。したがつてその記述に従えば梵本の(1)(2)にこの不動剣印の真言が説かれていない限り，西蔵訳にもまず一応はないと考えて良い訳になる。ところで私が直接梵本に当つてみた所では先にのべた如く祕祭剣の第二咒が不動の心印（acala-hṛdaya）としてあげられているのみで，この真言については何等の関説がなかつたのである。

また四体合璧大蔵全咒と称するものがあり，漢字，満洲字，蒙古字，西蔵字の四字音で漢訳大蔵経の全真言が挙げられている。しかしこれも量は甚だ厖大なものであるが，その質は底哩三昧耶等に関して私が見た限りではその西蔵字は漢字音から音写されたもので，決して西蔵大蔵経から抽出したものではなかつた。したがつてここに対校本として使用するに堪える性質のものでなかつたのである。

その他，覚禅抄，阿娑婆鈔にも，もちろんこの真言は何等関説せられていない。そこで先にあげた立印軌，底哩経等，私の探し得た限りの対校本を対照して掲げその正しい形を想定することにする。（対照表の分段は印刷組版の都合でかりに筆者が設けたものにすぎない）

〔I〕

（立 印 軌）曩 莫 三 漫 哆 嚩 日 囉二合引 赧

（一 巻 本）（欠）

（三 巻 本）（欠）

（不動使者法）（欠）

（請来梵字） na maḥ sa ma nta va jra ṇāṃ

（禡　祭　剣） na maḥ sa ma nta va jra ṇāṃ

〔II〕

（立　印　軌） 唵 婀 左 攞 迦引 拏 没 馱 際 吒 迦 吽 吽

（一　巻　本） *唵 ㉓娜 者 ㉔邏 ㉕加 拏 没 馱 制 吒 ㉖迦 吽 ㉗吽

㉓娜＝婀㈢(甲)(乙)　㉔邏＋㈡夾註㈢(乙)　㉕加＝迦㈢(乙)　迦＋㈢夾註㈢(乙)　吽＋㈣夾註㈢(乙)

（三　巻　本） 唵 阿 者 羅 迦 拏㉓引 勃 馱 制 吒 迦 吽 吽

（不動使者法） ㉝唵 阿 者 囉 迦 那 歩 陀 制 吒 迦㉞上吽 ㉟吽

唵＋(引)夾註㈢(丙)　上＋㈠(宋)(元)(声一)(明)(丙)〔上〕一(甲)　吽＋㈡㈢(丙)

（請　来　本） oṃ a ca la kā ṇḍa vu dhā ce ṭa ka hūṃ hūṃ

（禡　祭　剣）（？） a ca la kā ṇḍa vu dhā ce ṭa ka hūṃ hūṃ

〔III〕

（立　印　軌） 佉引 呬 佉 呬　伊 南㉔上上声

（一　巻　本） 佉 呬 佉㉘ 呬　伊 能

呬＋㈤夾註㈢(乙)

（三　巻　本） 佉 ㉔醯 佉 醯　伊 能

（不動使者法） 可 伊㊱許伊*反 可 ㊲伊　㊳一譚去

〔許伊反〕一(甲)　伊＋㈢(三)(丙)　一譚去＝一譚上(宋)(元)

（請来梵字） khā hi khā hi　i nāṃ

（禡　祭　剣） khā hi kha hi　i nāṃ

（i 点見エザレド）

〔IV〕

（立　印　軌） 仡 哩二合㉕上同*下* 囉 ㉖怛 ㉗曩㉘三合 䶃

〔上〕一(丁)　㉖怛＝恨(甲)(乙)(丙)　㉗曩＝娜(明)(丁)　㉘三＝二(丙)

（一　巻　本） 魚 哩二合 呬　㉙䶃

䶃＋㈥夾註(三)(乙)

(A)原則としてoを示すも、ūをも示すもの

(1) 模韻に属するもの

(一) 脣音 蒲(bhu) 菩(=蒲)(bo) 謨(=模)(mo mas)

(二) 舌音 都(tu to) 徒(do) 奴(tor do na nu no)

(三) 歯音 蘇(su sū sum)

(四) 喉音 烏(u) 呼(ho)

(五) 半舌 盧(ro ru) 嚧(=盧)(ro lo ru ruḥ)

(2) 姥韻に属するもの

(一) 脣音 補(po pu) 普(pho phu) *部(=簿)(bhū)

*部は厚韻の窠字としても現われる

(二) 舌音 覩(to tu tū t) 覩鄔(dyo) 杜(dho dhu)

怒no 弩(=怒)(nu nu) *努(=怒)(nu)

*馬渕本は怒の代りに努を窠字とす

(三) 歯音 祖(ca ?)

(四) 喉音 隖(u) 塢(=隖)(u) 虎(hu)

(五) 半舌 魯(ro ru) 嚕(=魯)(ro ru rū r lo lu)

(3) 暮韻に属するもの

(一) 脣音 布(pu) 怖(pho phu) 捕(bhū) 歩(=捕)(bhu bhūḥ bhūr) 暮(mo mu) 慕(=暮)(mo mu)

(二) 舌音 妬(to) 度(=渡)(dho dhu)

(三) 歯音 素(=訴)(su sū)

(四) 喉音 汙(u) 護(ho hoḥ)

(五) 半舌 路(ro rū lo)

(B)原則としてuūを示すもoをも示すもの

(1) 虞韻に属するもの

(一) 牙音 倶(=拘)(ko ku) 瞿(=劬)(gu) 虞(gu)

(二) 歯音 朱(cu) 芻(ṣu kṣa?) 藪〔芻の俗字〕(kṣo kṣu)

輸(śo śu śru) 殊(ju)

(三) 喉音〔以下三字全ベテ逾ノ字子〕瑜(yo yoḥ)楡(yo)

渝(yo) 四半歯 儒(jo)

(2) 麌韻に属するもの

(一) 牙音 矩(ku) (二) 歯音 數(ṣu)

(三) 喉音 瘦(yo yu bhyu)

(3) 遇韻に属するもの

(一) 軽脣音 附(vu) 務(śvo)

(二) 牙音 具(=懼)(gho)

(三) 歯音 取*(thor~) 戍(śo śu śro) 樹(ju)

*取の韻鏡音は次清、二位に付き ṣu に当る)

（請来梵字） pha ṭ　　ā ryā ca la ga ccha

（禰 祭 剣） pha ṭ（例のṭu）　　a rya ca la śa ccha
（ā?）　（ga?）

〔Ⅶ〕

（立 印 軌） 緊 止 囉引 也⑱徒
徒＝徒(明)(丙)(丁)

伊 南*上迦引 哩 養二合矩 嚕 娑嚩二合*引 訶㊲*引
〔引〕－(丙)

（一 巻 本） 緊 旨 囉 夜㉙ 思
思＋(仆)夾註㊂(乙)

伊引 能 迦引 哩 野二合句 嚕 曩 麼 娑 嚩二*合 訶㉘引
引＋(十－)㊂(乙)

（三 巻 本） 緊 至 羅 夜 思

伊引 能 迦 哩 羅 耶㉙二合句 嚕㉗ 耶 麼 莎 縛二合 訶
二合－甲　耶＝那(甲)

（不動使者法） 緊 之④囉　⑤斯
囉＝羅㊂　斯＋㈣㊂(丙)
(夜)＋斯(甲)(乙)

一 鄧 迦 哩 蝿 倶⑥ 嚧 那 摩⑦ 莎 訶
嚧＝盧㊂(丙)　莎訶＝莎訶㊄㊂(丙)
娑嚩訶(甲)(乙)

（請来梵字） Kiṃ ci ra ya si

i nāṃ kā ryaṃ ku ro svā hā

（禰 祭 剣） Kiṃ ci rā ya si

i nāṃ kā ryaṃ ku(?) ro svā　一見kaにも間違うほどの ha

〔Ⅷ〕

（立 印 軌）
(原本)麗本(甲)三十帖策子第廿三(乙)仁和寺蔵古写本(丙)高山寺蔵古写本(丁)黄檗版浄厳等加筆本

（一 巻 本）
(甲)元暦元年写宝寿院蔵本
(乙)黄檗版浄厳等加筆本

（三 巻 本）
(原本)延享三年刊豊山大学蔵本
(甲)元亨三年写宝寿院蔵本
(乙)高山寺蔵古写本
(丙)永久元年写高山寺蔵本（上巻欠）

（不動使者法）
(原本)麗本
(甲)三十帖策子第廿一
(乙)文和二年写宝寿院蔵本
(丙)黄檗版浄厳加筆本

〔Ⅰ〕

さて第一段は帰命句であるから，梵本の二本は共に vajrāṇāṃ の jrā が jra と短音になつているが，これが長音の誤りである事は漢訳の夾註（二合引）からも文法からも直ぐ断定できる。そこで第一段は

Namaḥ samanta-vajrāṇāṃ（普く諸金剛衆に帰命し奉る）となる。

〔Ⅱ〕

次に第二段の中，禍祭剣の oṃ 字は彫り損いの点が加つて一見何字かと怪まれるように彫られているが，oṃ 字であると思つて見ればそれが oṃ 字の彫り誤りである事は直ぐ判る。

次に acala は不動明王の〝不動〟で問題なしとして，次の Kaṇḍa が Kāṇa の誤字であることは第二咒の場合と同様で，いまさら言うまでもない。

次に梵本の vudhā では文意が通じないからこれは漢訳字の対訳例から見て（没駄，勃駄は常に buddha の対訳字として用いられているから）buddha の誤写誤伝とみればここは buddha-ceṭaka となり，'仏使者' となり，不動明王が大日如来の教令輪身として，常に不動使者と呼ばれている事実に合致する。hūṃ hūṃ は問題なく，不動尊の降伏，摧破の種子である。

次に Khāhi Khāhi は禍祭剣は繰りかえしの hi 字の i 点が写真では見えず ha に見えるが，請来本並びに漢訳から hi である事に問題はない。また不動使者法の「伊」が単なる i でなくして hi の対訳であることも可伊反とある夾註によつて明らかである。

〔Ⅲ〕

さて Khāhi は直接正梵は求められないが √khan '堀ル' の派生語に Khā '堀ルコト，堀ル者' の意があり，hiは感歎詞とすれば he の方が一般的で秘密事相の研究（P. 437）では不動尊の火界咒に於ける 佉啊（キヤキ） 佉啊（キヤキ） 薩縛（サラバ） 尾観南（ビギンナン） が Khā he Khā he Sarva-vighnaṃ と還元され，'オー堀リ去ル事ヨ，オー堀リ去ル事ヨ 一切の障碍ヲ' と訳されているが，hi は he の弱い形であり，hi でも感歎詞として '実ニ' とか 'サア' とかの意に用いられ，且つ命令法，Ⅱ人

称，単数の語尾には hi という形があり（但し √Khan は第一種動詞でその命Ⅱ，単には正梵では hi を用いないけれども）また，咄は韻鏡では内転第六開の喉音，清音で暁母の列にあり至韻に属する字で hi を表わし更にまた浄厳の『悉曇三密抄』の対訳例にも hi に対し咄が用いられることが見えている。（天和版中の本16丁裏）から，この場合は hi でも差支ないと思われる。なお hi を語尾とみるときは Khāhi はⅡ，単，命で，正梵 Khana の訛略と考える。

かくて本段は

oṃ acala-kāṇa-buddha-ceṭaka hūṃ hūṃ khāhi khāhi となる。

オーン（帰命）不動眇目者よ，仏使者よ，ウーンウーン（吽，吽）堀レヨ堀レヨ）

次に第三段の終り ināṃ は二梵本共に ināṃ となつているが，正梵には之に相当するものがない，強いて求むれば enad ‘それ，彼’ の女性，単，業格enāmの訛略と考えられる。ところで漢訳の立印軌の「南」は我が国音でも呉音こそナンであるが漢音はダンであり，底哩経の「能」は呉音ノウ，ナイ漢音ドウ，ダイにして，その中，漢音ドウのウが中国音の ng を現わすものである事は，「我が国の漢字音」の研究成果によつて既に知られている事であるから，南能（ダンダウ）等が梵音の daṃ を表わす対訳字として用いられるのに何等の差支えはない。特に三密抄には胎軌に daṃ の対訳字として用いられている事が見えているから，ここは文意の上からも idam の中性，業格 idam と解したいのである。その事は不動使者法の〝一譚〟がそれを良く現わしている。広韻に依れば「譚」の音は覃に等しく，而して覃は韻鏡では外転第39開の舌音，濁音，第一等の平声であるから，現代音は辞書に $t'an^2$ と表示されるが少くとも音訳当時の唐代ではその音は濁音とある以上 dan であつたと思われるからである。

而して enām より idaṃ の方が有力な理由は最後にもう一度咒末に漢梵共に同じ形で出るけれども，その際は次の語の Kāryam と性，数，格が一致せねばならぬから必ず idaṃ でなければならぬのである。したがつてここも idamの方が良いという事になるのである。

〔Ⅳ〕

次に初め数文字は未だ確信がない。結論的に言えば √grah ‘捕ヘル’ の命令法Ⅱ，単で grhṇa という形でないかと思われるのであるが，まづ梵本をみる

に禡祭剣は hṛ rhra と読まれ，請来本は hya rhbha となつているが，これでは全くどうにもならない。そこでまづ立印軌をみるに，仡哩二合とある。二合とある以上，仡は子音を現わすのみで，その韻の何たるかは必要としないのである。ところで仡は広韻に依れば疙と同音であり，疙は韻鏡では外転第19開の牙音の清濁音，入声の字であるから，その限りでは ng を表わす字とされている訳である。しかし対訳例としては疙は ga の対訳字であることが三密抄に見える。次に底哩経の「魚」は韻鏡に依れば，これまた内転第11開の牙音の清濁音平声の字である。而して最後の不動使者法の「蘗」はこの真言の（VI）段にも gaccha の ga にあてられている様に ga の対訳字である事は三密抄にも見えて居るのである。しかもこの字もまた韻鏡に依れば，牙音清濁音であるから（蘗字は直接韻鏡に現われないけれども，蘗は糵の略字であり，糵は広韻に依れば孽或は嶭と同音とある。而して韻鏡に依れば，孽嶭の二字は共に外転第23開の牙音清濁音で[illegible]は薛韻，嶭は曷韻の相違あるのみ，前者は我が国者ではゲツゲチとなり，後者はガツガチとなるが，何れにしても牙音の清濁音であることに変りはないのであるから）結局立印軌の「仡」，底哩経の「魚」，不動使者法の「蘗」の三字はいずれも韻はともかく子音は共に g 音を表わす対訳字であることを知るのである。

而して韻を示す「哩」は対訳例としては ṛ 若くは ri であるから，漢訳四本の対訳字はすべて一致して，その梵者が gṛ 或は gri なる事を示している。

次に立印軌の「囉怛那」なる三字は通常の対訳例からは ratna ‘宝’ を思わしめる。脚註に依れば（丙）本には二合の夾註があるから（丙）本はかく見たものであろう。しかし gṛ もしくは gri には結びつきにくいのである。もちろん三合の rtna は更に結びつかない。ところで脚註に依れば対校本の（甲）本（三十帖策子）（乙）本（仁和寺蔵古写本）（丙）本（高山寺蔵古写本）はすべて「怛」が「恨」になつている。そこで恨の音をみるに恨は三密鈔に依れば梵字 ha の対訳字として用いられている事がわかり，また韻鏡によれば，恨を始め護摩 homa の「護」，「憾」（hāṃ）賀（ha）虎（hu）等はすべて喉音濁音の字であることがわかる。そこで囉を冗字と考えれば，ここは gṛ hṇa となるのである。ところでこれを胎蔵法の一切奉教金剛の真言に，係係緊質囉也徙（he he kiṃ cirāyasi オー オー 汝は何を遅延するか）釳嗹很儜釳嗹很儜（gṛhṇa

gṛhṇa 執えよ 執えよ）とあるのに比較すると，kim cirāyasi という言葉は本真言にも後段にあり，立印軌の対訳字佐哩（囉）恨曇が gṛhṇa の音写であると考えて決して無理ではないことを知るのである。このように，ここが gṛhṇa であるとすると請来本の hbha は hṇa の誤写ではないかと考えられるがその可能性は請来本の大身真言に vighnaṃ（立印軌，尾観南）に対し請来本の梵字は jbha となつていることに求める事が出来る。なおこう見て来て再び禰祭剣の rhra をみると，写真では何とも言えぬが一応 rhra の如く見えるがまた何かその下にあるように見え，或は請来本と同様 rhbha ではないかと思われて来るのである。かくて二梵本は共に hṇa の誤写誤伝であつて，ここは gṛhṇa と断定して良いように思われる。（hṇa系hbha系は字体もよく似ている）

なお底哩経一巻本は対訳字からは〔gṛhi〕となり，三巻本と不動使者法は gṛhe となるが，それは √grah の弱語基（普通Ⅱ，命，単に用いる）の gṛhṇī の訛略たる gṛhṇi 或は gṛhṇe の ṇ が軽微で音写せられなかつた形と見ておく。

次に最後の「𠺕含」は二梵本，共に maṃ と短となつているが，之は明らかに不動明王の種子で，長音の māṃ が正しいと見たい。なお三巻本のみ，𠺕の前に摩（ma）があるが，他本より見て之は冗字とする。

かくて本段は

idaṃ gṛhṇa māṃ（これを執えよマーン（𠺕含））となる。

〔V〕

次に段初の hālahāla は，普通 halāhala の形で現われるが，hālahāla の形もあり，これは猛毒の名，故に次の毘沙は二梵本ともに visa とあるが，viṣa ‘毒’ の誤りと断定する。「沙」が Sa でなく ṣa の対訳字としてしばしば用いられる事は三密抄に見えている。即ち Sa の対訳字には娑・薩・三・散・拶・颯等があげられ，ṣa には沙・灑・刹・察・悉等があげられている。

次は「索跛多」であるが，索は入声とあり，跛哆は一巻本に鉢多二合とあるから，ここは一応 Sapta とみるのが最も適している。而して梵本に saḥ とあるのは入声の語によつて saḥ としたものであろうが，sap の sa が入声で涅槃点（visarga）は不要の筈である。それは不動使者法の颯多からも言える。

即ち哆と多の相違はあるけれども同音の字である「颯哆」が Sapta の対訳字として用いられている事は，大21.422Aにも見え，淮胝観世音の根本真言の始めの namaḥ Saptānām が南無颯哆喃（ナウボサツダナン）と音訳されている事からもわかるのである。なお三密抄に颯が sa の対訳字としてあげられている事はすぐ前にあげた通りである。したがつて梵本の saḥ は恐らく元来は Sa pta とあつたものを入声の夾註から，後に伝写の間に何人かが涅槃点をつけ加えたか，然らずんば上の rhbha といい，この saḥ といい，請来本の梵字は原典（梵本）からの抽出でなく，或は漢字訳よりの重訳ではないかとさえ思われる。

ところで，ここを Sapta と見れば何人も異存のない所であろうが，Sapta は‘七’の意であり，七毒という事があれば兎も角，寡聞にして七毒という事は未だ聞かないから，どうも‘七’では前後のつながりがつかないのである。

そこで一巻本の脚註に宋元明の三本が「素」であつたと見えているので，ここは Supta に非ずやというのが，同学会のときの酒井教授の説示であつた。Supta ならば √svap ‘眠ル’の過去分詞の形で‘眠りたる’より‘麻痺せる’の意があるから，ここでは‘毒にあてられたもの’という事になる。

しかし，またあくまで漢字訳の索，颯，梵本の sa の音を生かすとすれば，ここは或は Sarpta ではないかとも考えられるのである。もちろん Sarpta のいう形は辞書には見えないが Sarpita ならば‘蛇にかまれた’意であり，不動使者法では辟一切悪毒呪と名づけられているのであるから Sarpita が訛略して Sarpta となつたと見るのである。Sar ならば索入声の入声という夾註にも抵触しないからである。

なお Sar 等の r が一字として対訳されず，Sa 等に含まれて音写されている例は Sarva の薩嚩，dharma の達摩，Karma の羯磨等普通の事で，敢えて異とする必要はないのである。

次に aḥ 悪は問題なしとして，次の紇哩は常に種子 hrīḥ の対訳字である。立印軌の引入〔長音，入声の意〕の夾註がよく之を表わしている。立印軌の郝，三巻本の訶はいづれも hrīḥ の ḥ を示すもので，なお郝は涅槃点を示したものであるからたとえ，あつても問題はないが，立印軌の脚註では郝字がないことを示しているから益々問題とする必要がないわけである。また請来本の hya は前の gṛ の所で禰祭剣の hṛ に対し hya とあり，それが hṛ の書き誤

りである事をのべたが，ここでもまた禲祭の hṛ に対して hya とあり，請来本の転写者の常時の誤まりなる事が確かめられる。しかし hṛ では次の phaṭ からみて，どうにも格好がつかない。更に禲祭剣は hṛ の次に taṃ もしくは naṃ と思われる字があるが，請来本にもなく，もちろん漢字訳にもないから冗字と思われる。恐らく hrīḥ（紇哩）を hṛ とした結果 hṛtaṃ としたのかも知れず，また郝（haḥ）を赧（ṇaṃ）と見誤まつて hṛnam としたものかも知れない。何れにしても禲祭剣の hṛtam? 請来本の hya 等は誤写と認定する。

次に請来本は全然欠けているが禲祭剣の ha は立印軌の賀引の夾註が示す如く，短の a ではなくして長の ā であり，また単なる hā にも非ずして空点（anusvāra）を伴う hāṃ と解したい。即ちここは先の gṛhṇa māṃ の māṃ に対し，同じく不動明王の種子 hāṃ であると解したいのである。なお三巻本は hāṃ が hūṃ になつている。文意の上からはもちろんそれでも差支えないが他はすべて hā もしくは ha に近いし，禲祭剣の梵咒は直接，立印軌のそれであるからここでは hāṃ の方を採る。また不動使者法は「鴆」とあるが，夾註には鵠鴆反とあり，同経の後に出ずる不動慈救呪では（大21.27A）咒末の hāṃ māṃ に対し鴆忙の二字があてられ，且つその鴆には呼恨反忙の夾註がある上，その箇所の脚註に依れば宋元明の三本には明らかに憾紿（hāṃ māṃ）とあるので「秘密儀軌」の朱註者は之を鴆は鴆（hāṃ に当る）の誤字なりとしている（鐘三，9丁表）から，従つてここの鴆も既に夾註に鵠鴆反とある以上之が hāṃ である事は間違なく，鴆は鴆の誤字とせねばならないのである。

次は最後は phaṭ であるが，禲祭剣の常時の彫り誤りを除き，他は何の不一致もない。かくて本段は

hālahāla-viṣa-supta （or sarpta） aḥ hrīḥ hāṃ phaṭ（ハラハラ毒にあてられたものよ（汝に対して）アク　キリク　カン　パット）

となり，底哩経等は hālahāla の代りに hari- となる。hari は通常，Indra 神，又は Viṣṇu-Kṛṣṇa の異名とされ，栗毛色またはその馬の意に用いられるが，蛇の意もあり，ここは次の viṣa と共に蛇毒と考えたい。

また種子の aḥ hrīḥ hāṃ phaṭ は全て除障摧破を意味する種子で，aḥ は入涅槃の義を示し hrīḥ は普通阿弥陀如来の種子とされるが，その字義は一切の業障（h）塵垢（r）を浄除して涅槃（ḥ）に帰せしむる三昧（ī）を示すと

されている。なお hāṃ phaṭ は第一咒慈救咒の句義釈で前述した通りである。

〔VI〕

さて第六段以下は先にのべた如く，不動使者法では不動迎請咒とされている部分であるが，まず最初の（禍祭剣の）arya は a が短音となつているが，立印軌には明らかに引と夾註があり，また文意の上からも ārya（聖ナル）であることは問題でないと思う。次に cala は文意の上からみて'不動'の acala に違いないから ārya の a と合して ā とならねばならぬ。したがつて禍祭剣の（a）（rya）は請来本の如く a は前後共に長音 ā でなければならぬと思われる。

次に禍祭剣は Śaccha と読めるが，Śa と ga は形が類似して居り，Śa は明らかに ga の誤りと思うが，更にまた立印軌には擺に引の夾註があり，別に阿（a）の対訳字が，わざわざ捜入されているものもある位であるから，ここは Gaccha '行ケ' よりは āgaccha '来レ' の方を採るのが，不動使者法の迎請咒という命名から見ても当然であると思われる。

次に，禍祭剣の kiṃ cirāyasi は Cira '長キ' から来た動詞で，これには Ciraya, Cirāya の両方の形があるから，請来本に Ciraya とあつても，もちろん問題ではない。また立印軌の本文には止囉也徒と徒（tu or to）となつているが，それは原本麗本に依つたもので，（明）（丙）（丁）本等には正しく徒となつていることが脚註に見えている。

かくてこの段の正しい形は

āryācal'āgaccha! kiṃ cirāyasi? (ārya-acala āgaccha, kim cirāyasi)

聖不動（尊）よ，来れ，何ぞ遅延するか

となる。

この言葉は一見不遜のようであるが不動明王が奴僕の姿を示現し仏に仕えるはもちろん良く行者に仕えると説かれている事に合致する，即ち立印軌には

無動尊現身　奉事修行者　猶如婆誐鑁（大21.5C）とある。

〔VII〕

次に二梵本の √ināṃ が不適当であることは，既にのべた通りであり，ここでも不動使者法はその idam なることを「一鄧」の対訳字で示している。

次に Kāryaṃ はもちろん Kārya の業格で次の Kuru の目的格であり，そ

の対訳には三巻本の哩の冗字を除き不一致はない。養，蝿等の我が国音ウが中国音の ng，梵語の ṅ を表わすことは既述の通りであり，Kāryaṃ の ṃ が空点で表記されていてもその音が ṅ であることは勿論である。

次に禰祭剣の Ku は大分，見分けがたく，また次の字は二梵本共に ro となつているが，文意の上からも，対訳漢字からも，ここが Kuru（√Kṛ ‘作ス’ のⅡ人称，命令，単数）であることに間違いない。恐らく ro としたのは対訳字嚕・嚧等の我が国音から来た誤写であろう。それは梵字で o と表記される言葉がウと発音され，u と表記される言葉がオと発音されることはこれはすべて対訳漢字のよみから来ることであるが，我が国の真言読みでは常のことであり，三五相通とよばれている。一例をあぐれば Vairocana がビルシヤナと呼ばれ，hulu hulu がコロコロと読まれているようなものである。したがつてここは Kuru と断定する。

次に最後がソワカ Svāhā であることは，これは論ずるまでもないことであろう。なお，立印軌を除き，他の漢訳諸経典にはすべて Namaḥ の加句があるが，立印軌になく，禰祭剣にもないので，いまは省いておく。

かくしてこの段は

idaṃ kāryaṃ kuru svāhā／（この事をなせ，ソワカ(成就あれかし)）

となる。

いまこの真言を前後通じて示せば次の如くなる。

Namaḥ samata-vajrāṇāṃ／ oṃ acala-kāṇa-buddha-ceṭaka hūṃ hūṃ khāhi khāhi idaṃ gṛhṇa māṃ／ hālahālaviṣa-supta (or sarpta) aḥ hrīḥ phaṭ／ āryâcal' āgaccha kiṃ cirāyasi? idaṃ kāryaṃ kuru svāhā!／／

(5) 結　び

以上，写真のみで実物に依らず，また独断，推測を多く含んでいるが，一応第三咒の文意も判明したので擱筆する。（昭34.11.10）

（性澄祥量み郁文）